

北海道の酪農業にかんする

研究の歩み

千 葉 療 郎

一

酪農業が、わが国農業の一分野としてかなり大きな位置をしめ、農業政策のなかでも、相当のウェイトをもつて取扱われるようになったのは、戦後も近年のことに属するといえる。しかし、北海道の農業においては、酪農業は、すでに大正中期から重要な地位におかれ、とくに農業政策の対象として大きな意義をもっていたことは周知であろう。したがって、農業研究の課題としても、北海道酪農業の研究が重要性をおびていたことはいうまでもない。

ところが、従来、北海道の酪農業について説述したものはか

《ノート》 北海道の酪農業にかんする研究の歩み

なり数多くあるにもかかわらず、その大半は、政策的あるいは指導上の立場からする論説が主で、研究的な立場からの客観的分析ないし考察はかならずしも多くはなかった。そして、酪農業の諸問題にかんする体系的・系統的な説明は、むしろ近年ようやく進みはじめたといつて過言ではない。このような、北海道の酪農業にかんする研究の歩みと、その諸条件を、ここで概観してみたい。

戦前においては、酪農業研究の科学的成果はとくに数少ないつぎに掲げるように、伊藤俊夫博士の『酪農経済論』(昭和二六年刊)におさめられている戦前発表の諸論稿をはじめ、渡辺侃博士を中心とした北海道大学農業経営学教室の諸研究、あるいは荒又操博士の北海道興農公社にかんする論文などのほかには、あまり多くをみる事ができなかった。

1 伊藤俊夫博士の『酪農経済論』所収の戦前発表論文は、つぎの五編である。

- 第一章 原料乳の統制問題
 - 第二章 乳牛預託の一形態
 - 第三章 北海道酪農経済論
 - 第五章 北米合衆国における酪農統制
 - 第六章 アメリカ酪農業の集中過程
- なお、同書におさめられなかった伊藤博士の論文に、

「我国酪農統制の基本問題」(『農業と経済』第八卷第七号所載、昭和一六年)、「独乙に於ける酪農統制」(『京城大学法学会論集』第一三冊第四号所載、昭和一七年)の二編がある。

2 北大の農業経営学教室関係の研究論文としては、つぎのような諸編があげられるだろう。

渡辺侃「乳牛飼養育成の経済問題」(『法経会論叢』第一号所載、昭和六年)、工藤元「北海道の畜牛」(『札幌農林学会報』第一四五号所載、昭和一三年)、渡辺侃「北海道の酪農」(『北方農業』第四二卷第八号所載、昭和一七年)、北大農業経営学研究室「北海道太平洋側の酪農小経営」(昭和一七年)。

3 荒又博士の論文は、「国策会社と産業組合——北海道興農公社の問題」(『法経会論叢』第九輯所載、昭和一六年)である。

4 北海道独特の展開をしめした酪連(北海道製酪販売組合連合会)にふれた論稿として、出納陽一「北海道酪農と酪連の事業」(『社会政策時報』第二三〇号・北海道特輯号所載、昭和一四年)がある。なお、酪連の発達については、同会編『酪連十年史』(昭和一〇年刊)、酪連成立以前の煉乳加工資本の展開については、大日本製酪業組合編『北海

道煉乳製造史』(昭和一六年刊)などの文献が発行された。

かように戦前の研究成果が数少なかったというもの、けつして理由のないことではない。第一に、北海道の酪農業が展開をはじめたのは大正中期以後のこと、ことに本格的な展開は昭和初年からの北海道第二期拓殖計画以後のことに属し、当日は日はまだ浅かったという事情である。第二に、第二期拓殖計画による酪農育成保護政策のもとで、問題の関心はもっぱらその育成という点だけに注がれており、客観的分析を要請する問題意識が一般にとぼしかったということも指摘できよう。第三に、以上二つの事情から、分析にたえる充分な資料類、とくに統計資料の整備が不足していたのも当然と思われる。第四に、当時の軍国主義・ファシズムのもとで、自由な科学的研究が強く圧迫されていたことも忘れてはならない。

おもに右のような理由で、戦前の北海道酪農業の研究は、充分な発展をみる事ができなかったと思われるが、それだけに、これらの障害をのりこえて達成された戦前の研究成果は、貴重なものであり、輝かしい成果であったとことができよう。

二

戦後、みぎのような諸事情が、大きく変化したことは周知で

ある。第一に、北海道の酪農業も、ようやく三〇年をこえる年数をへて、その間に種々の変遷をたどってきた。第二に、敗戦後のわが国の経済情勢の変化が、北海道酪農業の環境をも、従前のきわめて保護的な環境から、国際的にも、国内的にも競争のはげしい状態に変化させ、これにいかに対応するかといういわゆる酪農問題をよく提起することになった。第三に、みぎの事情から、各種官庁機関・団体などの調査・統計資料類も、以前にくらべるといじりしく整備が進んだ。そして、第四に、科学研究の自由が大巾にひろげられ、それを圧迫から守る民主的な力もかつてなく強まったのである。

おおよそ、これらの事情が基盤となって、戦後における酪農問題の科学的な研究は、格段の前進をとげることができたといえるが、まず戦後初期、すなわち、戦時下に形成された酪農業の統制機構が一応改編され、戦後の酪農業がようやく本格的に展開しはじめようとした昭和二六年までの時期について、その期間の研究成果の主要なものをつぎにみよう。

- 1 『北方農業』第六一・二号（昭和二五年六月号）の特集「北海道の酪農問題」は、渡辺侃「酪農業の展望」、中西道彦「酪農業の再検討」、桃野作次郎「根室原野の酪農」の三編の論稿のほか、「将来の酪農業」、「酪農民の組織」、「酪農民と酪農会社」、「酪販連の在り方」、「ホルスタイン発展の

ノート》北海道の酪農業にかんする研究の歩み

過程」、「酪農民の望むもの」、「北酪社分割の経過」などの小論をおさめている。

- 2 伊藤俊夫博士の『酪農経済論』中の戦後の発表論文は、つぎの四編である。

第四章 北海道の酪農経営

補論一 北海道に於ける酪農経営の動向——十勝地方を

中心に

補論二 北海道に於ける酪農経営

補論三 北海道に於ける酪農協同組合の現状

- 3 伊藤俊夫編『北海道酪農の研究』（農業総合研究所研究叢書——以下研究叢書という——第一九号、昭和二六年一〇月）の所収論文は、

伊藤俊夫「北海道酪農の動向と課題——緒論にかえて」

西尾幸三「北海道酪農政策の基本的諸問題」

逸見謙三「北海道酪農の経済」

工藤元「北海道に於ける酪農経営の成立とその展開」

なお、西尾（現姓市岡）幸三氏は、ひきつづいて取りまとめられた『北海道の経済と財政』（研究叢書第二五号、昭和二八年三月）のなかで、酪農政策の財政的分析をこころみている。

みぎの通り、その数は多くないが、『北海道酪農の研究』のよ
うな本格的な研究があらわれはじめたことは注目されよう。こ
の時期の当初の関心は、北海道酪農業の戦時統制機構の改編に
ついて、酪農およびその加工組織の民主化問題に中心がおかれ
ていたが、これは、戦前の研究の主要な課題の一つが、酪農統
制問題にあったのと対照的である。それと同時に、北海道酪農
業の組織あるいは構造を再検討し、より深く把握しようとする
問題意識が進み、酪農生産・市場・政策の諸側面にわたって、
その成立と展開を分析する本格的な研究が開始されたのである。
むろん、このような本格的な研究ができるようになった基礎と
して、戦前の研究成果や文献資料類の蓄積がかなりの規模に達
したことを見逃がすことはできない。また、『北海道酪農の研
究』では、きわめて初歩的にせよ、共同研究の方法が用いられ
たことは、その後の北海道酪農業の構造分析にかなする中心的
な研究が、いずれも共同研究としておしすすめられたことと思
いあわせ、その出発点をなしたものとして評価したい。

三

みぎの時期につづく昭和二七年以降の北海道酪農業の研究は、
まず、二七年はじめの濠洲産バターの輸入問題に端を発した酪
農危機に触発されて、開始されたものといえることができる。当

時、戦後の農業における発展的部面としての展望をもって、よ
うやく本格的な展開をはじめた酪農業は、この問題で大きなシ
ョックをうけ、わが国とくに北海道の酪農業の脆弱性にたいす
る検討の必要が強調された。北海道当局が、前年に設立した道
立農業研究所で緊急に酪農問題の研究をとりあげ、北海道開発
庁が、農業総合研究所に委嘱して、十勝地方で酪農業の実態調
査を試みたのも、いずれもそのような必要にもとづいたものに
ほかならない。

1 北海道立農業研究所は、まず研究懇談会記録『北海道酪
農の諸相（酪農研究に期待されるもの）』（昭和二七年八月）
を発表し、ひきつづいてつぎのようないくつかの研究成果
を発表した。

宮下利三『世界に於けるバターと酪農の問題』（研究資料
第六号、昭和二七年八月）

宮下利三訳『飲用乳の消費を規制する諸要因——西独の
牛乳消費に関する研究』（研究資料第七号、昭和二七年一
一月）

岩元典一『牛乳生産費調査の一モノグラフ』（北海道農
業研究）第二号所載、昭和二八年二月）

崎浦誠治『牛乳生産費の分析』（研究資料第一二号、昭
和二八年三月）

崎浦誠治・山田昭一『北海道酪農経営の諸形態』(『北海道農業研究』第五号所載、昭和二十九年八月。研究資料第二〇号、昭和二十九年九月)

井上実・小野誠志「根釧農業の史的展開」(『北海道農業研究』第六号所載、昭和二十九年九月)

なお、『北海道農業研究』第六号には、つぎのような外国資料の紹介二編がある。

「牛乳生産費における牛群大小の影響」(岩元典一)

「畜産物の原価計算」(竹内寛)

2 北海道開発庁が農業総合研究所に委嘱しておこなった実態調査の結果は、桜井守正編『北海道酪農の経済構造——十勝における共同研究』(研究叢書第三二号、昭和二十八年一二月)として発表されたが、その内容はつぎの通りである。

序章 十勝酪農の概観(石関良司)

第一章 酪農経営(桜井守正)

第二章 牛乳の集荷・加工(斎藤仁)

第三章 酪農家の組織(湯沢誠)

第四章 酪農政策(千葉煥郎)

第五章 総括(桜井守正)

補章 乳製品の国際市場(逸見謙三)

《ノート》 北海道の酪農業にかんする研究の歩み

3 当時、各種の雑誌に発表された論稿はかなり多いが、ここでは省略する。なお、北海道の酪農先進地である八雲町の酪農家太田正治氏が、デンマーク農業を調査して送ったレポートを集録した『私は見たデンマーク農業』(昭和二十八年刊)が、北海道酪農業のあり方に多くの示唆をあたえるものであったことを、あげておきたい。

以上のような、この時期の研究成果について、その特徴をみると、まず第一に、外国の酪農および乳製品事情に眼が向けられているが、これは、当面した酪農問題が、外国産輸入バターの市場圧迫というかたちであらわれていたことから、当然の関心のあり方であった。ついで、そのような国際的な市場競争において、競争力を強化するコスト低減の問題が、牛乳生産費の研究を中心にとりあげられている。つづいて、酪農経営の安定化の条件を探求するために、現在の不安定要因を実態にそくして分析する経営構造の研究がおこなわれている。

なかでも『北海道酪農の経済構造』は、酪農経営安定のための諸条件を、経営内部の分析だけでなく、さらに、牛乳の集荷加工機構、酪農家の組織、酪農政策の機能などの諸側面にわたる酪農業の再生産構造のなかで、総合的に究明しているが、これは、参加者九名による共同研究によってはじめて可能となっ

た成果で、北海道酪農業の研究を進展させるうえに大きな役割をはたしたものである。また、崎浦・山田氏の「北海道酪農経営の諸形態」も、道立農研のメンバーによる共同調査の結果を崎浦・山田両氏がまとめられたもので、ここでも共同研究の方法がとられたことを指摘しておきたい。

四

ところで、酪農危機が騒がれた昭和二七年から一年しかたない二八年の半ばからは、乳製品の在庫欠乏、牛乳の不足が伝えられ、加工資本の牛乳争奪による乳価の引上げで、かつてない酪農ブームが出現することになった。このブームは翌二九年の後半には退潮したが、それ以来不況と好況との周期的交替のうちに、わが国の酪農業は発展をづづけている。このことは、近年におけるわが国酪農生産物市場の展開と、それに対応する酪農商品生産が一応軌道にのつたことを示すが、かような酪農業の発展にそくして、戦後の酪農振興政策もまたようやく本格的な態勢をととのえたのである。それとともに、酪農業の諸問題にかんする研究・分析もようやく汎汎にすめられるようになり、北海道では北大農業経済学教室、道立農研、総研北海道支所などを中心に、かなり系統的に研究が展開するようになってきた。それ以降の研究成果はかなり数多いが、その主要なものを

つぎにあげよう。

1 北大農経教室関係の研究成果としては、矢島武博士の著書「酪農と農業経営」（昭和二九年九月刊）と、季刊「農業経営研究」に発表された諸論文が主要なものである。矢島博士の著書では、第三章の「財政投資と酪農」、第四章の「酪農問題の諸相」が、酪農問題の解明にあてられている。「農業経営研究」掲載の発表論文はつぎの通り。

桃野作次郎「酪農経営の基礎と課題——日本乳業統計並びに調査を中心として」（第一号所載、昭和三〇年一二月）
杉上忠幸「根室原野の酪農経営——飼料生産をめぐる二つの型」（第二号所載、昭和三一年七月）

塩沢照俊「戦後の北海道酪農経営の動向について——酪農経営の増加・規模・生産力を中心にして」（同前）
川村琢「農産物の商品化と協同組合——デンマークの酪農組合を中心として」（第四号所載、昭和三三年五月）

山田定市「酪農業における農業協同組合の機能」（第五号所載、昭和三四年一月）
なお同誌には、北大関係以外で厚海忠夫・近藤邦広「乳牛経済検定五カ年の歩み」（第二号所載、昭和三一年七月）のような論稿や、渡辺以智四郎「水田酪農に対する一つの問題点」（第四号所載、昭和三三年五月）、千葉燎郎「酪農

研究の現状と課題」(第六号所載、昭和三五年三月)などの小論がある。

2 道立農業研究所は、ひきつづき数多くの研究報告を発表している。

保志恂「北海道の牧場経営の成立と展開」(『北海道農業研究』第七号所載、昭和三〇年三月)

桃野作次郎「酪農経営の構造分析」(同前誌第八号所載、昭和三〇年三月)

松野弘「先進酪農地の展開過程」(同前)

千葉燎郎「酪農の研究について」(同前誌第九号所載、昭和三〇年六月)

保志恂「農業危機と地主経営の生成」(同前誌第一〇号所載、昭和三十一年三月)

松野弘「八雲酪農の生成と展開」(同前誌第一一号所載、昭和三十一年一月)

松野弘・保志恂「協同組合乳業と原料生産農家の経済構造」(同前誌第一二号所載、昭和三十三年三月。研究資料第二八号、同年同月)

保志恂「農地改革と資本主義的大経営」(同前誌第一三号所載、昭和三十三年一〇月)

松野弘「根室沿海地域における酪農の生成と展開」(同

ノート) 北海道の酪農業にかんする研究の歩み

前誌第一四号所載、昭和三十三年三月)

松野弘「北海道における牧野、草地の研究」(同前誌第一五号所載、昭和三十三年九月)

松野弘「北海道における酪農組合の生成」(『調査研究速報』第七号所載、昭和三四年一〇月)

松野弘「北海道における酪農の形成」(『北海道農業研究』第一八号所載、昭和三五年三月)

松野弘「明治期における官庁の乳製品試造と民間乳業の生成過程」(『調査研究速報』第一〇号所載、昭和三五年一月)

松野弘「戦後における酪農の展開と今後への展望——新技術の導入と普及を中心にして」(同前誌第一一号所載、昭和三十六年一〇月)

このほか、崎浦誠治『農業生産力構造論——北海道農業展開の実証的研究』(研究資料第三〇号、昭和三十三年一月)も、酪農生産構造の解明に多くの示唆をあたえるものであった。また、同研究所が中心になった北海道農林漁業基本問題審議会事務局で発表した資料に、『北海道における飲用乳消費の見透し』(北基調16、昭和三五年六月)、『北海道における田畑輪換と水田酪農』(北基調22、昭和三五年七月)などがある。

3 総研北海道支所の研究成果の主要なものは、つぎのとおりである。

千葉燎郎 「北海道における酪農経営の規模別構成——階層性の指標として」〔農業総合研究〕臨時増刊号所載、昭和三〇年一月)

山田貢 「いわゆる酪農好況の経過」(同前)

千葉燎郎 「有畜経営と無畜経営——北海道の高丘畑作地帯における調査事例」(同前誌第一〇巻第二号所載、昭和三十一年四月)

『北海道における原料農産物の生産と流通』(日本農業の全貌研究資料第五四輯、昭和三十一年一月)

千葉燎郎 「酪農政策の動向と課題」〔研究季報〕第一六号所載、昭和三十三年五月)

千葉燎郎 「酪農化の発展条件」(農林省農林経済局農政課編『北海道農業生産力研究』所載、昭和三十三年六月)

伊藤俊夫編『北海道における資本と農業——酪農業と甜菜糖業の経済構造』(日本農業の全貌叢書3、昭和三十三年三月)

千葉燎郎 『北海道における牛乳の流通機構』(農林省農林水産技術会議・寒冷地農業調査報告VI、昭和二十四年五月)

山田貢 「戦後における家畜飼料の需給について——主と

して酪農との関連において」〔農業総合研究〕第一四巻第二号所載、昭和三十五年四月)

千葉燎郎 「北海道における牛乳流通と共販問題」(同前誌臨時増刊号所載、昭和三十五年八月)

このうち、共同研究『北海道における資本と農業』は、つぎのような内容をもっている。

序章 問題と方法(湯沢誠)

第一章 北海道における資本関係の特質と構造(湯沢誠)

第二章 北海道農業の発展構造と特質(湯沢誠)

第三章 酪農業と甜菜糖業の発展過程(湯沢誠・千葉燎郎・石関良司・山田貢)

第四章 原料生産の経済構造(千葉燎郎・石関良司)

第五章 加工資本の経済構造(山田貢)

第六章 酪農、甜菜をめぐる経済構造の変化(湯沢誠)

なお、総研本支所員の共同執筆による『北海道開拓農業の社会経済的分析』(北海道・開拓宮農振興対策調査資料、昭和三十六年三月)に、第七章「酪農経営の展開と開拓農業」(桜井守正稿)がある。

4 帯広畜産大学酪農経営研究室では、工藤元博士を中心に、十勝地方の実態調査にもとづく酪農経営の分析をおこなっており、とくに工藤博士は、線型計画法による経営分析を

すすめている。また田島重雄助教の『北海道における酪農教育ならびに普及』（研究資料第八号、昭和三四年九月）などの報告がある。

5 北海道農業試験場農業経営部は、田畑輪換経営の調査を実施し、「北海道における田畑輪換経営の実態分析」（昭和三三年五月）を発表した。その後、農業経営部研究資料第七号として『乳牛飼養経営の構造と類型に関する研究（第一報）——乳牛飼養類型区分』（昭和三六年三月）を発表している。

道立農業試験場経営部でも、経営試験農場の成績にもとづく田畑輪換経営の分析をこころみており、山本見一・千葉誠「田畑輪換における作付方式と乳牛規模の決定について——線型計画法の適用」（道立農試集報第六号所載、昭和三五年六月）を発表している。

なお、この報告の概要は「田畑輪換経営と経営設計」として季刊『農業経営研究』第六号（昭和三五年三月）に掲載されている。

6 木村慶一著『酪農天気図』（昭和三〇年刊）は、研究書ではないが、ジャーナリストの立場から酪農問題を論じ、とくに乳業における協同資本の問題について独自の見解を述べているので、ここにあげておきたい。

《ノート》 北海道の酪農業にかんする研究の歩み

以上のように、最近の研究成果は、酪農生産・流通・政策の諸側面について、その成立と展開を考察する歴史的研究から現状分析におよんでおり、かなり多面的になってきている。このうち歴史的研究は主として道立農研が中心になっており、現状分析は北大農経教室・総研支所その他がおもにこれをすすめている。そして、これらの研究をつうじて、酪農生産の構造分析がいつそう深められると同時に、従来比較的に研究のとぼしかった牛乳流通過程の諸問題にかんする解明が前進して、酪農業の展開構造が全体としてかなり明らかに把握できるようになったということが、最近の研究の特徴的な発展だといえよう。

かような研究の発展のなかで、総研北海道支所がほぼ一貫して、共同研究の方法をもって北海道酪農業の発展構造の体系的把握につとめてきたことは、注目されてよい。まず『北海道酪農の研究』では、酪農生産・流通・政策の発展過程がそれぞれに考察され、つぎに『北海道酪農の経済構造』では、それらの機構・組織・機能が、北海道の代表的な酪農地帯である十勝地方の実態にそくして説明されたが、ついで『北海道における資本と農業』では、北海道における資本と農業とのふれあいの発展のなかで、酪農業の展開構造を全体としてとらえ、とくに北海道農業の久しい課題でもあり、また最近もつともダイナミックに動きつつある甜菜生産と酪農生産との結合の問題をとりあ

げて、北海道農業の発展構造の特質にまでふれようとしたのである。これらの試みが、どこまで成功したかは大方の批判にまっすべきものとしても、北海道酪農業の構造分析を従来よりも大中に前進させ、酪農業の諸問題の解明に大きな手がかりをあたえるものとなったことは認められるであろう。

五

ところで、以上のような研究の前進にとつて、酪農関係の統計その他資料の整備の進歩が、大きな役割をはたしていることはいうまでもない。かような統計・資料類の整備について、その主要なものにふれておこう。

1 まずセンサス関係についていうと、昭和二四年二月一日の「家畜センサス」をかきりにして、その後の農業センサスでは酪農関係の統計がかなりとりあげられるようになったが、発展していく酪農業の動向を把握するには充分ではなかつた。ようやくこれにこたえたものが昭和三二年九月（照査票作成）から、三三年二月（農家調査）、三四年二月（農業集落調査）にわたつておこなわれた「緊急畜産センサス」で、その結果はそれぞれ公表されたが、照査票結果については市町村別統計表が各地区ごとにとまとめて刊行されている（農林省統計調査部、昭和三四年三月）。ま

た、昭和三三年一二月に実施された「臨時畑作調査」の結果が、『総合畑作統計表（北海道版）』（農林省統計調査部、昭和三五年三月）のなかで、地域別乳用牛頭数規模別に整理発表されている。

2 酪農関係の農林省統計で重要なものは、いうまでもなく「乳用牛調査」と「牛乳生産費調査」である。前者は、従前からの牛乳生産量調査を拡大して、牛乳の用途別消費量や乳製品の生産・出荷・在庫量などを毎月調査するもので、昭和二七年一月からはじめられた。後者も昭和二六年度から開始され、その後調査戸数の増加、調査方法の改善などで整備がすすんでいる。これらの資料を中心にとりまとめたものに、農林省統計調査事務所編『統計からみた北海道の畜産（一九五四）』（昭和二九年一二月）がある。また、農林省統計調査部『牛乳取引状況調査結果概要』（昭和三〇年三月）は、それまで資料がほとんどなかつた牛乳流通部面について、はじめて資料を提供したものであつた。

3 北海道統計も、昭和二七年八月の「牛飼養者実態調査」によつて、酪農関係統計資料が格段と整備されるようになった。とくにこの調査では、乳牛飼養農家の経営農用地広狭別、経営耕地広狭別、乳牛飼養頭数規模別などの資料がととのえられ、酪農生産構造の階層分析が可能になつた。

その後、毎年の農業基本調査でこれらの主要な酪農関係統計指標が継続的に得られるようになっていた。

4 北海道農務部農業改良課が昭和二六年四月から開始した乳牛経済検定事業については、年々の成績簿とその考察が発表されている。また、同課が昭和二九年に実施した乳牛飼養農家の実態調査結果が、『昭和二九年度酪農経営調査報告（第一報）』（昭和三〇年二月）として発表されている。

5 このほか、北海道農務部畜産課がまとめた『北海道畜産の展望』（昭和二八年）、『北海道の畜産（昭和三三年版）』（昭和三三年六月）とか、北海道酪農検査所の『酪農検査二十五五年』（昭和三一年五月）のような資料や、農協中央会関係の『北海道有畜経営農家事例集（第一集）』（北海道指導農協連、昭和二九年三月）、『優良畜産事業実施総合農協事例——北海道有畜経営事例集（第四集）』（北海道農協中央会資料第一五号、昭和三二年三月）などの資料もある。乳業会社関係の資料は、一社独占の時期には北海道酪農協同株式会社「酪農基礎調査」の結果などを毎月公開していたが、昭和五年の四社分割によって乳業各社の競争が生じて以来、こうした資料がいつさい社外に公開されなくなった。

みぎのように、酪農業関係の統計その他資料類の整備は、昭和二六―二七年を契機に急速にすすんできた。酪農業にかんする研究が、昭和三〇年前後から質量ともに発展を上げたのも、このような資料の蓄積に依拠するところが大きいことが明らかである。

六

以上、北海道の酪農業にかんする研究の歩みを、主要な研究業績、文献、資料類について概観した。もちろん、不十分な考察に過ぎないし、見落としもあると思われるが、その研究発展の大きな足どりと、近年における大きな前進のあらましはつかむことができると思う。

そこで、最後に、北海道の酪農業にかんする研究の現状にたって、今後にのこされた課題の若干について、簡単にふれておきたい。

まず、酪農生産過程にかんするものとしては、第一に、酪農経営の資本形成の問題がある。最近の酪農発展における生産資本の形成が、どれだけ自己蓄積によっておこなわれ、どれだけ制度金融をはじめとする融資に依存しているのか。またそれがどれだけの収益性をしめし、どれだけの資本効率を發揮しているのか。これらの問題を地域的、階層的にそれぞれ明らかにし

なければならぬ。ことに、北海道における農家負債累増の一半が、酪農金融によるとさえいわれられているだけに、この解明はきわめて重要な意義をおびている。

第二に、みぎの資本形成の問題とも関連して、共同経営の問題がある。酪農経営の共同化は、北海道では、内地府県よりはやや遅れているが、最近その事例を増しつつある。現在動きつつある段階で問題の把握はかならずしも容易ではないが、その動向と問題点を追跡しておくことは、必要であろう。

第三には、酪農生産の諸要素にかんする経済的研究の問題がある。飼料経済の研究については、前記のように総研山田研究員の成果があり、道立農研の松野弘氏も手をつけておられるので、その発展が期待される。これにたいして、乳牛の育成と流通の経済問題にかんする研究は、ほとんど未着手の分野としてこのこされており、今後の大きな課題となっている。

つぎに、牛乳流通過程にかんする研究としては、乳価決定機構の問題があげられる。牛乳流通の局地性と、加工資本対原料乳生産者の取引関係のより広汎なひろがりとの間で、乳価がどの段階でどのように決定されており、また決定されるべきものであるか。この問題の解明は、とくに牛乳共販運動の今後の発展および乳価政策にとって、きわめて重要な課題だといえる。

この問題については、諸外国の事例の研究も有効であろう。

また、北海道における乳業資本の発展過程の研究も重要な一課題である。とくに酪連から雪印乳業への組合製酪の発展転化過程の解明は、大きな今日の意義をもつものといえよう。この課題については、道立農研の松野氏が研究をすすめておられるので、その成果を期待したい。

以上で北海道酪農業の研究にかんするのこされた若干の課題にふれたが、いずれにせよ、現在の酪農経済の開闢構造は、とくに乳業資本の全国的規模への発展とともに、全国的視野のうち把握されなければならない。北海道の酪農業についても、そのような全国的規模における酪農業の展開構造を究明するなかで、正しい位置づけをあたえなければならぬ。このことが、北海道の酪農業にかんする研究にとって、今後の前進の主要な方向とならう。